

## 趣旨説明

『麗気記』は、両部神道の代表的な書とされているが、その内容の解明や思想史的な位置付けが十分になされていない。大正大学総合佛教学研究所神仏習合研究会では、『麗気記』全十八巻の校本・書下し文・現代語訳・註釈の作成を進め、前半六巻について『校註解説麗気記Ⅰ』（法蔵館、二〇〇一年）を刊行した。現在も続編を刊行すべく作業を継続しており、中間報告として「心柱麗気記」と「神梵語麗気記」の解説を『大正大学総合佛教学研究所年報』第二五・二六号（二〇〇三・四年）に掲載した。

『麗気記』の研究としては、内容の解説だけでなく、その社会的・歴史的な位置付けも重要である。かつて<sup>『校註現代麗気記Ⅰ』</sup>の解説執筆により、二〇〇〇年の本学会

## 三 橋 正

で「ワークショップ『麗気記』にみる中世―神道思想研究の新たな視点を探る―」と題するパネルを設け、成立についての試論、図像と言説の関係、中世における『麗気記』の註釈書、近世における受容の変化などについて論じた（本誌第三三号に要旨を掲載）。しかし、続編の註釈作成中に明らかになった点も少なくない。そこで今回のパネルでは、中世社会における『麗気記』の存在価値や影響力に焦点をあて、全巻の構成や言説、註釈や儀礼を分析し、『麗気記』が作り出した世界と、中世における思想界での位置付けを考える。

この『麗気記』特有の世界観とその広がりを相対的に解明しようとする試みが、中世思想史研究の発展に少しでも

寄与することができれば、幸甚である。

(明星大学助教授)